



『国際化はすべて心。 人への感謝と感動を持たれば、心は通じる』

— パンカジ・クマール・ガルグ氏 アイ・ティ・イー株式会社 代表取締役・CEO



「農業は英語でアグリカルチャーといえますよね。アグリカルチャーという単語の中には、カルチャー(文化)という単語が含まれています。これは農業と文化が密接に結びついていることを意味しています。農業を失うと文化にも影響します。」

「日本には、素晴らしい農産物があるのに、それが失われていきつつあり、日本の文化にも色々な影響が出てきていると思っています(例：少子化、自殺の増加等)。農業を主要産業の一つにすれば、日本も元気になります。アイ・ティ・イー社(以下、ITE)のガルグ氏は開口一番こう語った。」

「インドの大学を出て日本に来てから20数年、日本は私を育ててくれました。だからその恩を返さないといいません。インドには『カルマ(業)』という言葉があります。人のために懸命にやれば、結果として自分に返ってくるという教えです。経営者は『儲け、儲け』といますが、それだけでは信用は得られません。相手に尽くして相手を(信者)にする。漢字で儲けは、信者と書くでしょう。信者を増やせば、自然にビジネスはうまく進みます。お金でも、国でも人種でもありません。だから、私はお世話になった日本へ恩返しをしようと思っています。」

「ITEのポリシーは『人のため』です。まず人のためというカルマがあり、次に感謝と感動があります。自分に感動がないと、他人に感動は与えられません。そこに国家や人といったような垣根はないのです。皆、いい人間と信じ、相手に合わせる。つまり、それが国際人の心だと思っわけです。私は農業に注目し、その物流の革命に挑戦することを思い立ったのです。」

モノ作りの原点は農業

「もともと彼が日本へ来たのは、人がやらないことをしようと考えたからだという。」

「親戚には経営者が多く、誰も日本には行かない。言葉や食物の違い、こだわりもあります。しかし、モノ作りが好きな私にとり、やはりモノ作りは日本だし、誰も行かないから行きたいというチャレンジ精神もありました」

「サヨナラという言葉しか知らずに来日したが、そこで一人の国際人との出会いに恵まれる。」

「勤めていた神戸製鋼のシャワールームでラグビーチームの監督だった山口良治さんとお会いしたので」

「物流という未知の世界だった。」



す。英語を話せない彼が『ハロー・グッドモーニング』と声をかけてくられて驚いたのが最初です。それから交流が続き、いまは顧問として助けてもらっています。まさに国際化は言葉ではないという体験でした」

以来、ガルグ氏は日本を拠点に働き、日本の文化と人情を愛してきたと述懐する。そしてその感謝をカタチにする時が来た。彼が13年前に台湾で見いだし、自費で使用権を取得していたアイスバッテリーの事業化だ。

「かねて日本の農産物は、日本のモノ作りの原点であり、素晴らしい世界一の品質だと思っていましたが、残念ながら流通に不可欠な品質保持の手法は、コストのかかる冷蔵・冷凍輸送やドライアイスに頼っていました。」

それではせっかくの日本の農産物を海外へ運ぶことはできません。しかし、アイスバッテリーなら長時間の品質保持が可能です。つまり海外へ向けた産業として、日本の農業を再生できるのです」

従来のドライアイスでの温度管理はCO₂を大量に放出し、湿度を奪う欠点があり、鮮度保持剤を使用しても劣化が免れない。対してアイスバッテリーは、つねに適切な温度調節が可能で、鮮度は2〜3倍長く保たれ、CO₂も大幅削減。再利用も可能な保冷システムである。

農業を輸出産業へ

「この保冷システムは品質を落とさず、日本のオーガニックの農産物を中国など海外の富裕層へ向け輸

出することができます。さらにワクチン輸送などの医療にも活用可能です。この保冷システムをアジアに持って行けば、物流の革命になるでしょう。このエコ物流サービスで、私たちはJALとの共同開発を進めることができました」

起業して3年、しかし、日本での活動は決して容易ではなかったと告白する。

「ビジネスの習慣が独特ですから、難しさがありました。実力だけでは動かない。周囲との関連性が大きいですし、餅は餅屋で、一丁屋の私が説いても怪しまれてしまいます。石橋を叩いても渡らない日本の体質ですが、好きなだけ叩いてもいい誘いが、好きなだけ叩いてもいい誘いが、コネのあるインドや中国という誘いもありましたが、私は日本のためになると思い、どうしても日本でブランディングしたかったです。」

人は困った時に変わります。日本は決して外国人にとってやさしい国ではありませんが、文化を愛し、郷に自ら入ることで心を通わせることができると思っていました」

何度だまされても、許すことで一歩進み、感謝することで気にならなくなったのだという。その根底には、彼のひたむきな日本への尊敬と愛があるようだ。

「私は日本の美しい海と山を愛しています。農作物はその環境あつての産物で、他ではまねができません。アイスバッテリーでそれらを世界へ運ぶことができれば、日本の農業の再生にもつながるというわけです。幸い、ようやくアイスバッテリーの「信者」がどんどん増えてくるようになりました。間違いなく日本の農産物は世界で売れます」



パンカジ・クマル・ガルグ
インド国立大学でコンピューターサイエンスを専攻。卒業後、1988年に来日し、株式会社神戸製鋼所にソフトウェア・エンジニア/開発に従事。その後、株式会社安川電機、シーラス・ロジック株式会社などを経て、99年からはインテル株式会社でグローバル戦略部長に。2008年、米国フォックスビジネススクールにてMBAを取得。半導体分野においていくつかの特許を保有している。